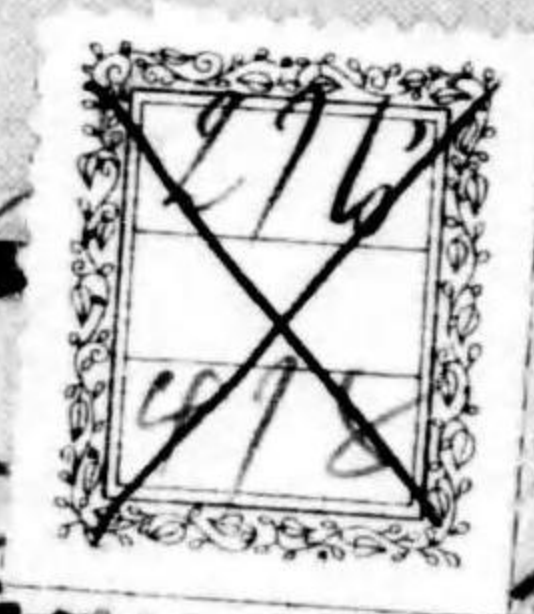


(12) 嘸伽お界世館ンブフ

玉姉



京東
版藏館文傳



特



始



新加坡世界館ニブフ

12

附鏡の
教訓 柴山著

姉妹
王女



京東
版藏館文傳

持104
834

緒言

世界お伽噺第十二編

印度

姉妹王女

附鏡の教訓

此お伽噺わチャールス、スウインナート
ン氏の、『インディヤ物語』にある話から録

大正
3. 3. 28



二人の王女が……嫌せん何したら宜いで……よねア、仕様がなね……

作したもので、筋にわ随分編者の創意を加えました。



姉妹女王

世界お伽噺

第十二編

姉妹女王

お伽俱樂部著

昔、印度の或地方に一人の王様が居りました。
所が不幸にも王妃わ、未だ幼い二人の奇麗な王
女を残して御崩れになりました。

而して王様にわ未だ御世繼の王子がないんで、
家來共わ頻と王様に向つて、男の御世繼を求め

女 王 妹 姊



世 界 如 佛 斯





る爲に、又王妃を御迎いになる様にと勧めました。王様も始の中、二人の幼い王女を可哀そうに思召して、家來共の云う事をお聞きになりませんでしたが、永の月日にわ色々の御不自由もあり、又國を案じて家來共の頻に勧めるので、遂に枉げて、二度目の王妃をお迎いになりました。然し二度目の王妃は、容貌の美しいのに引變て、鬼の様な恐ろしい心の人で。俗に云う、「外面如菩薩内心如夜叉」と、でも申す様な至つて無慈悲な、酷い性質の人でありました。



而して可哀そうに、未だ何の識別もない姉妹の王女を恐ろしく憎んで、甚しい事には、日々御飯ですらも、碌に與えないで、平素虐めてばかり居りました。

可哀そうに姉妹の王女は、朝夕悲しみ歎いて居りました。而して或日、姉妹手を引いて死んだ阿母様の御墓へ行き、生きて居る人にでも物云ふ様に、石塔に取縋つて、何か言付ける様に泣きながら云つて居りました。

すると何所から、何うして何者が持つて來た



ものか、石塔の前に、奇麗な模様のある大きなお皿に、香氣と云い、味と云い、何とも申分のない結構な御馳走が、しかも山盛に盛上つてありました。姉妹わ之を見て、大變喜んで仲善く分けて啖べました。

それから姉妹わ、毎日雨が降ろうが、日が照ろうが、只の一日も缺かさず其所へ来て、御馳走を啖べました。而して姉妹わ、何して此様な美味しい御馳走が、毎日此所にあるかと云う事が、判然わからんながらも、何でも、神様の御



助け下さる事と思つて、御馳走になる前も啖べてからも、天に向いて御禮を申しました。其様な風で、今迄に瘦衰えた身體も忽ち肥つて、姉妹共元の丸まつちい、可愛らしい王女となりました。

茲に又、繼母の王妃わ、平素一匹の赤猫を飼つて居りました。其猫わなかく敏捷い猫で、加旃に人の言葉を聞き分けて、人間と同じ様に物を云いました。而して又善く、王妃の氣心を呑み込んで、姉妹の王女が、外えでも出掛ける



時わ、見え隠れについて行つて、樹の上などに登つて、姉妹のする事わ何でも、氣をつけて見て居りました。

或日王妃わ妹姉の王女が、仲睦しく手を引合つて、出て行く所を、熟々見て居りましたが、余程腑に落ちぬ事があると見えて、頻に首を振つて、一人で考え込んで居りました。

「……………ウン、……………どうも近頃姉妹の様子わ余程異變しいね、……………三度の御飯だつて、碌すつば給與わなないで、ほんの僅少な麵麩屑

しか食べさせないのに、……………マー何したんだらう、……………憎らしい程丸々してること。」と、獨言を云いました。

すると側に榮螺の様に丸くなつて、蹲踞んで居りました赤猫わ、さも得意な顔相で蠢々起き上つて、小さい雑碎した顔に、思ふ様皺を寄せて噓を一つしながら、

「ナニニ王妃！ 何にも不思議な事アありませんよ、王女わ毎日阿母様の墓え行つて、御馳走を貰つて食べるんですア、だから彼





様に僕よりかも肥つて居るんですア、……………」
と、云つて、己が樹の上から見た、御馳走を思
い出したものか舌打をして、不整頓な髭をビク
つかせました。

王妃わ此話を聞くと、急に氣色が悪くなつて、
二三日過ぎると、眞實の病人になつて仕舞いま
した。而して醫者よ薬よと、色々介抱しても癒
る所か、段々悪くなるばかりでありました。

或日王様が、王妃の病痾を見舞われました時
に、王妃わ王様の手を堅く握つて、



「妾の病氣わ先の妃の祟なんですすから、先
の妃の骨を墓から掘出して、何所か遠くえ
捨て、仕舞つて下さい、……………」そうすれア直
と病氣が癒るんですすから、……………」何卒其様し
て下さい、……………」きつと癒るんですすから、……………」
と、頻に頼みました。王様わ之を聞いて、いく
ら何でも、余り惨酷すぎる事だと思ひました
が、其様しなきや、可愛い王妃の病氣が平癒ら
んと云うんで、詮方なく家來共に言付けて、早
速掘出して、遠くの山え捨て、仕舞いました。

← 女王妹姊



↔ 嘶伽お界世





すると不思議にも、王妃の病氣が全快つて仕舞いました。然し姉妹の王女わ、之を聞いて大變歎きました。

「之から何しまししょうね？.....」
と、妹が泣きながら、姉に申しました。

「之から先何なるうとも、神様にお委せ致しまししょうね、モ一仕方がないんですもの。」
と、姉わ妹を抱えて泣きました。而して其夜わ可哀そうに、姉妹わ蒲團の中に抱き合つて、一晩中泣き明かしましたが、翌日わ矢張姉妹で、



いつもの様に、阿母様のお墓え参りました。

所が哀れにも、昨日まで立派になつて居た御墓が、僅一夜の中に悉皆崩されて、石塔わ二つに割れて飛んで居るし、土わ掘返した儘になつて居るんで、之を見た姉妹の王女わ、急に胸がつかえ、涙わ瀧々と夕立の様に落ちて來ました。姉妹わ稍暫時穴の側に蹲踞んで、泣いて居りました。所が又例の赤猫が此様子を見て、早速王妃に言付けました。すると王妃わ大變怒つて、姉妹の王女を遠い森え捨てる様にと、王様に勸



めました。馬鹿な王様わ、また王妃の云う事を聞いて、朝早く姉妹の王女を森え連れて行つて、「阿父様わ今直に歸るから、此所に花でも摘んで、穩順しく遊んで居なさいよ！……。」と、騙して王様わ宮殿え、逃げ歸りました。王女等わ其様な事とわ夢にも知らず、穩順しく遊んで居りました。然し日が段々と西に傾いて、余程遅くなつたんで今更の様に、「阿父様！ 阿父様！ 阿父様！……。」と、泣きながら大きな聲で呼びましたが、阿父



様の影も形も見えないんで、愈捨てられたもんと思ひ付いて、「姉さん！ 何したら宜いでしようね！……ア、情ない事になつたわね！……。」「ア、仕様ががないのね！……。」「ア、仕方がないから、早く阿母様の所え行ける様に、神様に祈りましょね、……ア、仕様ががない……。」と、姉妹の王女わ紅葉の様な、可愛い掌を合して、泣いて居りました。左右する中に、モ一日が暮れて仕舞いました。



すると遠くの方に、螢火の様に、ちらくくと燈火が見えましたから、姉妹は大變力強くなつて、其を見當に疲れた足を引摺ながら歩きました。而して漸うの思いで来て見ると、其所に大きな薄暗い城がありました。而して門の前に普通の人間よりも、二三倍も有るかと思われる程の大きな婆さんが、星の様に煌々光る兩眼で、姉妹の來るのを瞰んで居りました。此婆さんわ此地方の森に住んで居る、人食鬼でありました。然し此人食婆さんわ、外見によらぬ、穩順し



い氣の婆さんで、邪氣ない可愛い姉妹の王女を見ると、突然大きな掌で、姉妹の頭を撫て乍ら、「なんとマー可愛い兒だね、マー何だつてお前方わ、斯んな所え來たんだね？ 此所わ人食鬼の居る所なんだよ、今に私の悴が歸つて來りや、直と食われて仕舞うよ……。」と、親切に云つてくれました。姉妹の王女わ此話を聞いて、大變驚きました。何しろお腹がすいて居る所え、モ一足が棒の様になつて居るから、逃げる事が出來ないんで、

女 王 妹 姊



141

嘶 伽 世 界



142



世 界 お 伽 噺

「お婆さん！後生ですから助けて下さいよ。」
と、泣きながらお婆さんに縋付いて頼みました。
斯様なると人食婆さんも、尙可哀そうになつて、
大急ぎに姉妹を筐の中へ隠しました。
すると其と同時に、悴の人食鬼が歸つて來ま
した。而して高麗犬の様な鼻を、ビク／＼動か
して、「オ人臭い！オ人臭い！」と、叫んで居
りました。遂に酒を飲んで寝て仕舞いました。
翌朝早く悴の人食鬼が出て行くと、婆さんわ
姉妹を筐から出して逃がしてやりました。



姉 妹 王 女

而して丁度夕方頃、姉妹の王女わ、果物の澤
山なつておる森へ來ました。其所で早速果實を
食べて、其晩わ其所に寝てしまいました。
其から姉妹わ、此所を住所と定めて、姉わい
つも樹の上で、針仕事をして居ると、妹わ五六
頭の牝鹿と一所に、森の中を廻つて、食物など
を集めて來ました。斯様にして、姉妹の王女わ
楽しく、此所に八九年ばかり過ごして、姉わ十
七、妹わ十五になりました。
或日いつもの様に、妹わ牝鹿を連れて、出て



行こうとすると、姉わ一輪の花を渡して、

「お前が遠くへ行つて居る時に、若し此花が凋む様な事がある時わ、きつと姉さんの身體に變つた事が、起つたんですから、直ぐ歸つて来て下さいよ！.....」

と、云いました。其所で妹わ、其花を大切に持つて出て行きました。

すると間もなく、「バード」王と云う若い王様が、家來共と一所に、王女の居る森え狩獵に來ました。所が合悪く其日わ、雉鳩一羽しかとれませ



んでした。而して丁度御飯時に、王様わ家來に、

「アレ彼所に焚火が有る様だから、此雉鳩を甘く料つて來い！.....」

と、言付けました。其所で一人の家來が畏敬つて、焚火の所え來て、雉鳩を炙つて居りました。而して何氣なく上を見ると、美しい姉の王女が樹の上に居たんで、喫驚して、肝腎の御用を忘れて、王女に見蕩れて居りました。其から廳て氣が付いて見ると、二つとない大切の雉鳩が黒焦に焦て居りました。家來わ之を見て、歎く



まいことか、散々歎きましたたが、モ一取返しがつきませんでした。すると姉の王女わ、家來の歎くを見て、氣の毒に思つて、

「若し御家來さん！ 何も其様に歎く事わ

ありませんよ、貴所が何者にもお話しな

らない様なら、屹度お救い申しましよう！」

と、云いました。家來わ大變喜んで、堅く約束

を致しました。其所で王女わ、美味しく料つて

ある雉鳩に、牝鹿の乳を添えて與えました。

家來わ喜び勇んで、王女から貰つた御馳走を



王様に差上ると、大變御意に召して、

「何者が此鳩雉を料つたのか？.....」

と、お尋ねになりました。家來わ畏敬つて、

「ハイ私が料理まして御座います！.....」

と、答えました。すると王様わ血相變えて、

「此偽り者奴！.....」

と、叱りつけて、今にも矢をもつて、射殺そう

と致しましたから、王女わ我を忘れて樹から飛

び降り、王様の側に駈付けて、始終の話を致し

ました。王様わ王女の委しい話を聞いて、大變

← 女 王 妹 姊



↔ 嘶 伽 也 界 世





世界お伽噺

其親切なのに感心して、王女を連れて宮殿へ歸りました。其時姉の王女わ、妹に行先を知らずる爲に、道に沿うて芥種を撒いて置きました。話變つて妹の王女わ、姉より貰つた花が急に凋んだんで、急いで歸つて來ましたが、モ一影も形も見えないんで、頻に姉の身上を案じて、途方にくれて居りました。

所がフト芥種が、蛇の様に蛭つて撒いてあるのを見て、必定姉の行先に違いないと思つて、牝鹿を連れて後を追つて行きました。



姉妹女王

すると遂に、バード王の宮殿の門前へ出ました。其所で始めて、姉がバード王の王妃になつた事を聞いて、大變安心致しました。

而して今直ぐ遇うよりも、時節を待つて遇う事として、下に綺麗な小川の流れておる、町外の小高い丘に、假小家を建て、五六頭の牝鹿と一所に、氣樂に暮して居りました。

話戻つて、バード王の王妃わ、王様にわ大變可愛がられました。多くの侍女共に大變妬まれました。



其から丁度十月目に、王妃わ玉の様な可愛らしい、男の兒を産みました。其時侍女共わ産れると直ぐ、王妃に知れない様に、そつと赤坊と炭取と取り代えて、可哀そうに生まれたばつかりの赤坊を、町外え捨て、仕舞いました。而して悪い侍女共わ、王様に王妃が炭取を産んだ様に申上りました。すると王様わ、大變御腹立ちになつて、何の詮議もなく、可哀そうに王妃を牢屋え入れて仕舞いました。

話變つて赤坊の方わ、運善く、町外の小高い



丘に住んで居る。赤坊の叔母さんにあたる、王妃の妹に拾われました。

所が後で妹王女わ、姉の不幸を聞いてから、思いがけなく自分の拾つた赤坊が、バード王の王子で、自分の甥だと云ふ事がわかつたんで、それから尙一層大切に、可愛がつて牝鹿の乳で育て上げました。

それから丁度、王子が五歳になつた時、バード王わ、いつも肥え太つた馬に乗つて、妹王女の住んでおる丘の下を流れる、小川に水を飲ま



世 界 お 伽 嘶

せに來ました。

妹王女わ之を見て、王子にも木の馬を作らえてやりました。而してバード王が、小川え馬に水を飲ませに來た時に、王子を木馬に乗せて小川えやりました。

而して水際に立つて、バード王に聞こえる様な大きい聲で、

「木馬よ木馬！」

水飲め木馬！」

と、謳わせました。



姉 妹 王 女

バード王わ之を聞いて、王子に向い、
「馬鹿な坊やだね！ 何して木馬が水を飲めますか？……アハ、子供わ馬鹿な者だね！」
と、云つて、行つて仕舞ました。

それから王子わ小家え歸つて、叔母様に其通り話しました。其所で妹王女わ、明日バード王が尋ねた時に、「オ！賢い王様！ 何して女が炭取を産めますか？……アハ、王様わ馬鹿な者だね！」と、答える様にと、善く教えて置きました。翌日バード王が小川え來た時に、王子わ

女 王 妹 姊



斯 伽 书 界 世





世 界 お 伽 嘶

木馬に乗って、小川へ行きました。而して、

三十八

「木馬よ木馬！」

水飲め木馬！」

と、謳いました。バード王わ笑い乍昨日の通り、

「馬鹿な坊やだね！ 何して木馬が水を飲

めますか？……アハ、子供わ馬鹿な者だね！」

と、尋ねました。其所で王子わ、

「オ！賢い王様！ 何して女が炭取を産め

ますか？……アハ、王様わ馬鹿な者だね！」

と、同じ様な事を云って、早々と木馬に乗って、



姉 妹 王 女

小家え歸つて来ました。

バード王わ王子の答に驚いて、王子の後を追

つて小家え来ました。其所で妹王女わ丁寧

バード王を小家に迎え入れて、王子の事だの自

分等の身上などを、委しく物語りました。

バード王わ夢から覺めた様に、始めて眞實の

事が知れたんで、大變喜んで、直様妹王女と王

子とを、宮殿え連れて行きました。

而して姉の王女を、牢屋から出して二人に遇

わせ、もとの通り王妃と致しました。

三十九



世界お伽噺

それからまた、王子を町外へ捨て、王様を騙した悪い侍女共を、みな殺して仕舞いました。而して王子を大きくなつて、立派な賢い王様となり、妹王女を隣國の王様と縁組して、楽しく世を送りました。

めでたしー めでたしー

世界お伽噺第十二編終



鏡の教訓

附録 鏡の教訓

お伽俱樂部著

むかし、印度の山奥に、インナと云ふ吾儘息子が居りました。インナのお父様のグ井ンは、どうかして一人息子インナの吾儘を直してやりたいものださ心配して居りました。グ井ンは、ある時印度の都に行つて、一面の鏡を手に入れました。まだ鏡が流行り始めの時分でしたから、山奥に住む人達には、鏡さ云ふものが大層珍らしかつたのでした。



世 界 お 伽 噺

グ井ンは鏡を吾家に持つて歸りまして、これ
でインナの吾儘を直す工面はないものかと思案
を致しました。

暫く腕組をして思案をして居りましたグ井ン
は、ボンと膝を打つて、

「これインナ、鳥渡此處へ來い。」

と申しますと、次の間で晝寢をして居たイン
ナは、

「何だいお父さん。折角いい心持で晝寢して
るところを起してさ。」



鏡 の 教 訓

「まあ好いから來て見なさい。珍らしいものを
手に入れて來たから、お前に見せてやらうと
思つてるんだ。」

「珍らしいもの？ ぢや行きませう。」

とインナは眼を擦りく遣つて來ました。父
のグ井ンは鏡を袋のまゝ、インナの前に出し
ました。

「お前に見せたいと思つてるのはこれだ。」

「何か入つてるの？ 袋の中には。」

「鏡と云ふ珍らしいものが入つて居る、お前の

鏡の教訓



世界お伽噺





部屋へ行つて緩くり見て御覽なさい。」
 インナは命ぜられたまふ、鏡を自分の部屋へ
 持つて歸り、袋から出して一目見ると、自分の
 顔がありくく寫て居ります。
 「これは珍らしい。お父さんは何處からこんな
 珍らしいものを持つて歸つたのだらう。」
 とつくづく鏡を眺めて居りますと、父のグ井
 ンが遣つて來まして、
 「これインナ。その鏡に寫るお前の顔を能く見
 て置きなさい。今鏡に寫つて居る顔が、神様



から下さつた本當の顔だ。併しお前に悪魔が
 乗り憑ると、お前の顔色も目の色も違つて來
 る。その時お前は吾儘を云つたり爲たりする
 のだ。」
 インナは悪魔を聞いて身慄して、
 さうですか、私はまだ悪魔に乗り憑られた時
 の顔を見た事がありません。」
 と云ひながら、其日は鏡を袋に入れて納つて
 置きました。インナが吾儘を始め出すと、お
 父さんのグ井ンは、



世界お伽噺

「それ今だ。悪魔の乗り憑つた顔を早く鏡で見
て御覽」

「どれ寫して見ませう。」

インナは鏡を袋から出して眺めますと、吾な
がらゾツとする程恐ろしい顔。それを一目見た
インナは其れつきり吾儘を云つたり爲たりする
ことを止めましたとき。

鏡の教訓 終

世界お伽噺

定價 各冊 金拾錢
郵税 各冊 金二錢

第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
頓智娘	旗檀物	姉妹王女	魔法の兄弟	二人の兄弟	雪羽の鷹	金羽の鷹	薔薇の少年	大膽な少年	哀れな少女
以下	順次	出版	以下	順次	出版	以下	順次	出版	以下
第十五編	第十六編	第十七編	第十八編	第十九編	第二十編	第二十一編	第二十二編	第二十三編	第二十四編
臆病惡魔	笛吹愚助	象の牡牛	葉の牡牛	王女の犠牲	蛙國漫遊	忠婢モルギアナ	殺鬼太郎	鳩人孤兒	二人の孤兒

大正三年三月廿五日發行
不許複製

賣捌所 博文館

振替東京一七一九九番
電話浪花三八一九番

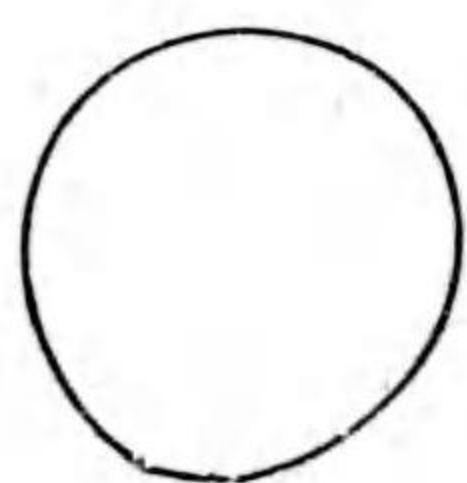
279
498

第拾參編

旃檀物語

附 慾張爺さん

本書わ讀んで面白く、筆法平易流暢、少年
諸君に對して無二の好本なり、宜しく一日
も速かに、御購讀あらん事を希望致します。



終